
クロス × ドミナンス

白銀シュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロス×ドミナンス

【Nコード】

N7919Y

【作者名】

白銀シュウ

【あらすじ】

——『全ての人間の行動や思想は神によって定められたモノである』。

とある次元の狭間からやってきたトンデモ非科学的な神秘的存在であるアイツの台詞だ。神に弄ばれる人形のままで終わりたいのなら自分と悪魔の契約をして“超能力者”になれなんて言いやがる。だから神に刃向かう存在になって理から逃^{うんめい}れて、俺は新しい自分を探すためにアイツ——自称・墮天使のアリエルと契約をすることに

なった。超能力者になったことで初めて見えた本当の世界は、新しい自分を探す俺に何を見せてくれるのか…

超能力モノ。世界を救うとかそういう感じの物語っぽくなりそうな気もする。正義とかヒーローとか全くない残酷な世界に堕ちてしまった人間たちによるアンチヒーロー系近未来SFストーリー。

【1 1】 華麗奔放な少女（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。つまり、この物語はフィクションです。

【1.1】 華麗奔放な少女

「運命ってモノ、アナタは信じてる？」

まるで新興宗教に勧誘する狂信者のような台詞だったが、口ぶりからはそんな雰囲気や微塵も受け取ることが出来なかった。

むしろ純粹に、真面目に、哲学を語り合う学者たちのような雰囲気を感じ取られた。

「ありとあらゆる生物が誕生した時から神的存在から与えられている決められた巡り合わせというものがこの世界では“運命”と呼ばれている。つまり言い換えれば、『過去が定まっているならば未来も定められている』ということにもなる」

午後十一時を過ぎた今の時間帯、本来ならば誰一人としていないはずの児童公園で二人の人間が対面していた。

優しさを思わせる風によって夜桜が舞い散るこの公園はブランコと滑り台、鉄棒くらいしかない貧相な公園であったが、近隣の子供たちにとっては数少ない遊び場であり、太陽の昇っている時間帯ならば子供達の喧騒で随分と騒がしい。

しかし、現在は風の音と風によって揺れる木々の音くらいしかない。

「自分が自分で考えて行動したことや考えた思想が最初から神によってそうなるように仕組まれていた、ということになる。例えば、十二歳の誕生日に事故で亡くなる人間がいたと仮定しよう。事故といっても不慮の事故だったり信号無視による事故だったりと分かれるだろうが、それは置いておこう。とにかく、死んでしまった人間の周りの人間は嘆き悲しむはずだ。『どうして死んでしまったの』とね」

チカチカと点滅を繰り返す古ぼけた街灯では二人の顔が見えない。

空も雲に覆われて月の光も差し込まない。

「…普通ならば事故・不幸・不運だったと考え、そこで思考は停止してしまう。だけど、これが仕組まれたものだったり犯人が故意にした行為——突き飛ばしとか信号無視とかだったりしたら遺された人間は不幸だった、で済ませることなんてできないでしょ？もし、その人間が“十二歳の誕生日に死ぬ運命”を持って生まれてきた人間だなんて神に定められていたとしたら許せないでしょ？」

国道沿いの丘を登った地点にあるこの公園からだと言の街の街灯やネオンによる明かりが結構見えるのだが、二人はそんなものに見向きもしなかった。

話している話題は恋人の会話なんてものには程遠く、雰囲気も真逆のベクトルを突っ走っている。

今まで黙って話を聞いていた片方の人間——ブランコの前で立っていた男性は溜息をつく。

「…ここまで黙って聞いてやってたけど、お前は俺になんて言うて欲しいワケ？」

「何でもいいよ。アナタの意見が聞きたいの。アナタは自分の全てが神に掌握されていることをどう思ってるの？」

ブランコを吊るす両鎖を掴み、ブランコの板の上に立つ少女相手は男に回答を求める。

男は考えているのか黙り、何も口に出さない。

「考えてみなよ、テストで百点を取る為にがんばって勉強したとしても神によつて定められていなければその努力も無駄、むしろいいように弄ばれた結果だけしか残らない。株で大儲けを企んだとしてもそうなる運命がその人間になれば大損して失敗するだけ。自分の意志なんか最初から無いものじゃない。…意識だけ備え付けられた子供に操られるお人形と同義じゃない」

「…じゃ、俺がモテないってのも、勉強が出来ないってのも、妹に陰悪にされてるってのも、全部は最初からそうなるように仕組まれていた、ってことでもいいのかよ？」

「そうなるね」

男は黙る。

「まあ、人間の矮小で浅ましいプライドなら『何でも他人のせいにするな』っていう一言で終わるんですけど…アナタはどう思うの？」

「そりゃ、運命論が確かなら殴りたいくらいにはム力つくさ」

「…そう。ふふっ、そういう考えの人は嫌いじゃないよ」

少女は微笑む。

少し強い風が雲を動かし、月明かりを下界へと当てる。

満月。古くから特別な存在として恐れられてきた満月の明かりが二人を照らす。

「…で、結局お前は俺に運命云々の話をして、何がしたかったんだ？」

男は月明かりでようやく見えるようになった少女の顔を見て少しだけ視線をずらす。

「…アナタは、価値がある人間ね」

少女は左手の人差し指を口に含んで舐める。

「私は人間を観察するために下界へと降り立った存在。人間がどういう手を使って、どのように運命に足搔くのかにとっても興味があるの」

少女はブランコから降り立つと男のほうへと歩み寄る。

ブランコの前にある事故防止用の柵を挟んで二人は再び対面する。顔を見せた状態で。

「だから、私と契約して超能力者になってくれない？」

西暦二〇三〇年 四月七日。

男——んがむらけいすけ梅村啓介は一人の少女と出会ったことを切欠に自身の世界を大きく変えていくこととなる。

【1. 2】 神々の超越者（前書き）

この物語は、ある程度の史実を織り交ぜながらも完全にこの現実世界とは完全に別の未来を歩んでいる別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家とかその他固有名称で特定される全てのものとは、何の関係もありません。何も関係ありません。

つまり、この物語はフィクションです。

【1.2】 神々の超越者

四月八日。

俺の住む国、日本国では卯月とも呼ばれているらしく、新年度や新学期の時期なので全国の学校や会社などでは入学式や入社式が行われる事は有名だ。

その八番目の日、つまり世間で言う灌仏会の日、俺はアニメにおける第一話の最初のカットにでも出てきそうな程によく晴れた空を見ながら今日から始まる学校へと歩みを進めていた。

これで桜でも舞っていれば文句ナシ百点満点の入学式日和なのだろうが、生憎な事にこの街の桜は昨晚の強風によってほとんど散ってしまい、今はもう三分葉桜にしか見えない。

あと、俺は高校二年生なので入学式がどうなるうとも関係ない。

だから桜なんてどうでもいい。

「高校二年生ねえ。よくもまあ留年しませんでしたってな」

そう、俺は日本のとある地方都市に住む只のしがな高校二年生だ。

県内でも有数の進学校に在校しているが、俺の住む県は他県と比べて学力が低いので全国平均レベルとなっているのが実情だ。

つまり、大して勉強ができるわけでもなければ、運動神経が良い訳でもない。

絵心だとか音楽性だとかそういうった芸術センスもない。

結論、只の高校生ってことだ。

大事な事だから二回言っておく。

「…眩しいな」

いつもより少々激しめの自己出張する太陽をチラリとだけ見ると俺は歩き出す。

学校なんて友達も居ないし、行っても意味が無い…のだが、将来のためにも行かなくてはならない。

時代がどれだけ進もうとも学歴社会だけは絶滅しなかったこともあり、この二〇三〇年でも高卒の採用率なんていうまでもない。

だが…

「…はあ。学校に行くのも…帰るのも嫌だなあ」

昨日の夜の件について考える時間が欲しかったのも理由だった。

時は数刻ほど遡る。

「…超能力者？」

梅村啓介は目の前の少女の口から放たれた言葉に怪訝な反応を返す。

「そう。超能力者。この世界の今の時代じゃサイキッカーとかって言うのかな？」

人間である以上、どんな染色体異常であろうとも存在しない色であり、普通ならば奇異の目で見られてしまいそうな水色よりもやや濃いアクアブルーとも言うべき色の髪を見て啓介は「綺麗だな」と心で呟く。

マイナスイオンでも放ちそうな印象を抱かせるその髪は、腰まで届くとても長いツインテールであるにも関わらず重量感が全く感じられなかった。

「…超能力なんて前時代的な迷信だな」

「迷信とは失礼な」

少女は少しだけ怒ったかのように頬を膨らませる。

暗闇の中でも翡翠を埋め込んだかのように透き通り輝くその瞳は、同じ様な緑色の瞳を持つ北欧の人々すら見惚れてしまうであろう程の神秘さを啓介に見せつけていた。

きつと、どんな著名な作家やどんなに語彙を暗記している学者で

あろうともその美貌を見れば、彼女を修飾する事のできる言葉など見つからないことを思い知らされてしまうだろう、と考える程に目の前の美少女は素晴らしかった。

だが、話していることが残念すぎてどうも恋愛対象や性的対象として見れない。

「超能力だろ？冷戦期の米ソや第三次世界大戦期の中国じゃねえんだ。…超能力なんて宇宙人に並んで非科学的すぎる」

「ふーん。…人間君、キミってもしかして“自分の見えている世界だけが全て”だなんて思っただけ？」

「…思っただけよ。俺は主観で喋ってるんじゃないよ…」

「キミは超能力を信じてないみたいだけど…他の人間は信じてるかもよ？」

「四十年前にアメリカの国際研究機関が『超能力は存在しない』って結論付けてんだよ。今じゃ懐疑派だのどうこういう以前に話題にすら上らないネタになってんだよ」

啓介は溜息を押し殺して目の前の美少女に答えを突きつける。

少女は溜息をつく。

「…超能力を信じないなんてなあ」

「あのなあ…お前が電波系ゆるゆる不思議少女だってことは十分に理解した。だから、精神科行け」

「失礼なッ!？」

「超能力があるっていう証拠も見せられていないのに超能力を信じろなんて無理言うなよ。俺はそういつた年齢をとくに過ぎてんだ。厨二病ごっこがしたいならもつと年下…じゃなくてお前の場合…年上か？まあ、とにかく十四歳辺りの人間を誘えよ」

「むう…」

百五十前半くらいの身長にスラリと伸びた美脚、まだ少々肌寒い四月上旬の午後十一時だと言うにも関わらず、彼女は少しだけ背丈の合わない女物のカッターシャツの様な肩出しシャツを着ている。

普通は下にタンクトップやらキャミソールやらを着ると思うのだ

が、ボタンが外れている胸元を見る限りでは彼女は下には一切何も着けていないらしい。

啓介は「今世紀十本指に入るクラスの美少女なんじゃないだろうか」なんて考えて少女を見つめる。

少女は握り拳をつくった後に左手の人差し指で啓介を指差し、発言した。

「じゃ、今から超能力を見せてあげる！！」

啓介は手元の携帯電話をチラリと見る。

時間は午前八時ちょうど。

学校に着くには少々早すぎたので教室には誰一人いないかもしれないが、彼としては一人で考える場所が欲しかったのでむしろラッキーだったかもしれない。

啓介は昇降口へ入ると自分の靴を履き替える。

「（よくよく考えれば、俺ってとんでもない体験をしてしまったんじゃないのか？）」

昨日のあのアリエルと名乗った少女。

人間離れた容姿や奇抜な服装、世間知らずという観点から見ると間違いなく“人間外の何か”にカテゴライズされなくもない雰囲気を用意していた。

「（超能力。アイツがいうには“因果律に反する本来持つてはいけないモノ”らしいが……。なんでアイツはそれを俺なんかに与えようとしたんだ？）」

啓介は考える。

梅村啓介は、この二〇三〇年を生きる只の何処までも普通で普遍的で凡人なスキルしか持たない一般人であり、決して前世が大魔王

だとか実は王族の隠された継承者だとか忍者の末裔だとかそんな特殊な設定は一切無い。

両親が物心つく前に他界してしまったこともあるが、自分や兄妹にそんな隠された設定は無いはずだと啓介は考えている。

だから、テロリストが学校に押し入ってきて粹がった不良が見せしめに殺されたとしても、自分の片想いの女性（そんな人はいないが）が人質にされたとしても、親友が実は射撃能力抜群だとしても（親友なんていないが）、啓介はテロリスト相手に覚醒して戦えるような器を持った人間ではないのだ。

むしろ教室の隅でガタガタ震えているモブキャラの一人だろう。

「（アイツが言うには、俺の運命は“悲惨”らしいが…それに憐れみを感じて超能力を与えようとした、ってわけでもなさそうだしな）」

未来の自分がどんな悲惨な目にあっているのかはともかく、現在の自分はわりとマシな方だ。

学校には通えているし、食べ物に困ったことも無い。

「（同情で能力与えるなら今頃人類の半数近くが超能力者になっているっつーの）」

恐らく同情だとか憐れみだとかそんなものではないもつと別の“何か”が、アリエルを引きつけたのかもしれない。

だが、その“何か”がわからない。

「（…わかんねえな）」

啓介は階段を昇り終わると自分の在籍する教室【1・7】に入る。始業式が終了した後、新しいクラスを教えられてその教室へと変わるのだ。

この教室も今日で最後だ。

「（考える。考えるんだ。アイツが何故俺に目をつけたのかを…）」
啓介は自分の席である窓際の最後尾に座ると手を顔の前で組んで考え始める。

「（アイツの思惑が理解できない限り、どうやって行動すればいい

のか……)」

「……はあ？」

啓介は聞き返す。

しかし少女は啓介を通り抜けると公園の真ん中へと歩いていく。数分前まで小雨が降っていたこともあり、地面は泥でややぬかるんでいるというのに泥が全く付着していない裸足、赤と黒の短いチエックスカート、腰のベルトに纏わり着いている沢山のチエーン。

一度見たら二度と忘れることがない程のインパクトを啓介に見せつけてくれたた少女の一言によるこの後の行動は、啓介にとつて不運だったのか幸運であつたのかは、恐らく永遠にわからないだろう。「私の名前はアリエル。風を操る精霊から名前を取っていることもあつて、一応【風】の属性を持った墮天使として神々の超越者^{ゴッド・イーター}の中ではまあまあ名前が知れ渡っているけど」

「^{ゴッド・イーター}神々の超越者……？」

聞いたことも無い単語を耳にした啓介は少女——アリエルに尋ね返す。

「次元と次元の狭間に住み着いている神とも天使とも悪魔とも宇宙人とも何とも言い切れない不安定で曖昧な存在。人類に超能力を与え、文明の発展を影から見守ってきた存在。それが私達^{ゴッド・イーター}」

思い切り厨二病設定を晒してくれた。

「……つまり、オーバーロード的存在ってことでいいのか？」

「まあそうなるね」

「だったら目的は何だったんだ？」

仕方ないので厨二病に付き合つてやることにする。

啓介自身、中学生時代は“厨二病なんてアホらしい”と考えてい

たこともあり、厨二病を発症しなかったものでちよつとやってみたい気分にもなっていた。

「完全なる善意か？侵略的意図か？実験か？偶然か？それとも、お前達よりももっと上の存在からの命令か？」

啓介はたずねてみる。

「私達は全員が同じ考えをもって行動しているわけじゃないの。だから善意で干渉した者もいれば、実験が理由で干渉した者もいる」

「お前はどんなんだ？」

「さあ？」

アリエルは啓介の問い詰めをサラツとかわす。

まるで言外に“聞くな”と言っているようだった。

アリエルは深呼吸をすると啓介に忠告する。

「あ、そうそう。何か物にしがみついていた方がいいよ。下手すると飛行機とかが飛んでるレベルの高度まで打ち上げられちゃうから」

「…はいはい」

啓介は近くにあつたブランコの事故防止用の柵に右手を置く。

それを見たアリエルはもう一度だけ深呼吸をした。

「じゃ、久しぶりに行使しますか」

アリエルがパチンと指を鳴らした瞬間だった。

戦闘機から発せられるような爆音がほぼ同時に四方八方から発生したかのような音が啓介の耳に響く。

台風の風速よりも強烈な風が発生し、周辺にあつたありとあらゆるものが風に巻き上げられて吹き飛ぶ。

公園の木々は全てが根元から圧し折れて桜や葉は一瞬で消え去り、アリエルのそばに立っていた電灯もガコンと変な音をたてながらひしゃげて捻じ切ったかのように折れてしまう。

近くの住宅街や建物の窓ガラスが粉々に砕け散り、住宅の壁に亀裂を刻み、駐車していた車を凹ませ、吹き飛ばす。

ほぼ一瞬。

パチンとアリエルが指を鳴らした瞬間だけでこの被害。

「……………」

啓介は地面に座った状態で目を見開いていた。瞬間的に柵を掴んだことにより、命は助かっていた。

アリエルがこちらに被害が及ばないように調節したのもあったのだろうか…

「ね、どう？信じる気になった？」

アリエルは微笑みながら啓介の顔を覗き込む。

啓介は呆然とした顔をしていた。

目の前の光景に頭の処理が追いついていないのだろう。

しばらくアリエルが啓介の目の前で左手を振りながら「おい？見えてる？」なんて話しかけること数十秒。

「……な、なん、だよ、今の」

やっとひり出した声は随分と小さかった。

心の奥底から恐怖心がわきあがってくる。

目の前の存在は、ホンモノのバケモノだ。

啓介は今にでも逃げ出したかったが、腰が抜けてしまっていたのか立てない。

「今が私の超能力かな。まあ、まだまだ使えるんだけどね」

「…か、風？」

「うん。私は【風】の属性を持つからね。空気や風に関する超能力の行使は得意なほうかな。逆に地や火に関連したものは苦手かも」アリエルはスラスラと聞いてもいないのに答えてくれる。

啓介はその姿を見て“コイツに敵意はない”と本能が判断したのか恐怖心が薄れていく。

「これで、超能力が存在するってコトと、私が普通じゃないってコトはわかってくれたかな？」

「……ああ、嫌というほどわかったよ」

啓介は立ち上がる。

するとアリエルは微笑む。

「それじゃ、私と契約して超能力者になってくれない？」

アリエルは啓介に手を差し出す。

「…断る」

だが、啓介は拒絶の言葉を口にする。

アリエルは目を大きく開く。

「な、なんで！？今の所って普通は契約するものじゃないの？雰囲気読んでよ！？」

「いや、だって…超能力なんてモンを見たら逆に得体が知れなさ過ぎてちよつと怖くなってきた」

「えええ！？ちょ、超能力が手に入ったら一気に変わるんだよ！？昨日までの自分とおさらばして新しい自分ヨロシクできるんだよ！？」

「いや、俺別に今の自分のままでいいって思ってるし。何よりも、超能力者なんぞになってもし政府みたいな国家機関にばれてみる。

…人体解剖とか怖いっての」

「ヒーローになれるかもしれないんだよ！？」

「いや、拳銃とかナイフとか怖くてムリ。人を殺したり倒したりするの抵抗あるし」

「ええええええ！？」

アリエルが不満の声をあげる。

それに遅れて遠くからサイレンの音と人の声が聞こえる。

「…警察かよ！？」

啓介はハッとして辺りを見回す。

さきほどの暴風は間違いなく丘の下の方のほうからでも観測できずに違いない。

下手すれば被害が出ているかもしれない。

「やばい…」

この周辺の住宅に住む住人達の声も聞こえてきている。

先程の暴風による被害の確認だろう。

「（被害総額数百万は堅いぞ！？こんな所…見つかったら死ぬるッ！…）」

啓介はアリエルの手を掴むと公園から飛び出す。

「え？え、ええええ！？」

アリエルはいきなり差し出していた方の手を掴まれる。

「も、もしかして契約する気に！？」

「なるかボケエエツ！！」

啓介は人目のつかないルートを走る。

先程の暴風でこの一体の街灯は全てが機能停止しており、真っ暗になっている。

「（真っ暗でよかった）」

「ど、どこに連れて行くの！？」

アリエルの声を見殺して啓介は走る。

あのまま、アリエルを放って置けば間違いなく警察に捕まりペラペラと真相を喋ってしまうだろう。

名前を明かしていないものの、そこから啓介に繋がる可能性なんてゼロではない。

「（ヤバイヤバイ。どれくらいヤバイかっていうとマジヤバイ！）」

啓介は公園から西のほうへと走っていく。

行き先は、自宅だ。

啓介は教室に飾られた時計をチラリと見る。

時刻は午前八時三十分。

クラスメイトも全員がそろい、仲良く喋っている。

「（…アホくさいな）」

啓介からしてみれば、友達の何処がいいのかわからないのだ。

一人でも出来ることをどうして複数名でやろうとするのか、何故群れるのか。

昔、小学校低学年のときに啓介の担任は「人という漢字は二人の人間が互いに支えあっているものであり、人間は一人では生きていけない」なんて言っていたが、啓介からすれば「人っていう漢字は一人の人間が足を広げてても作れる」なんて言ってやりたい気分であった。

「（別に“無口キャラ”気取っていたわけでも“厨二病キャラ”気取っていたわけでもないんだけどな）」

とにかく人間はよく群れていた。

群れた人間は孤独な人間を見て哀れんだり、蔑むようになる。

そのルールは啓介に対しても適用されていた。

だから修学旅行にも文化祭にも体育祭にも啓介は全く参加しなかった。

「（まあ、そんなアホなことはどうでもいい。今はアイツのことだ）」

啓介にとって現在最も重要な議題は昨日出会ってしまった少女のことである。

あの後、変な成り行きで自宅に泊めてしまったこともあるが、アリエルは今頃啓介の部屋で惰眠を貪っているだろう。

本人曰く「行くアテも帰るアテも無い」らしいのでしばらくは泊めてやるつもりだが…

一つだけ恐ろしいことがある。

「（兄貴か姉さんか…妹か）」

兄妹の存在だ。

啓介の兄なんて連絡は一ヶ月に一度はよこしてくれるものの何処にいるかなんて全くわからない。

仕送りをしていているところを見る限りでは働いているみたいだが。

「（兄貴は問題ない）」

啓介の姉もどこで何をしているのかわからないが連絡は取り合っているし、たまに帰ってくる。

三月に帰ってきた際に「半年アメリカに行って来る」なんてことを言っていたので多分大丈夫なはずだ。

「（姉さんも大丈夫）」

最後に妹だが、一番厄介である。

今年から中学二年生になった彼の妹は隣の県にある女子限定の学園に在籍しており、去年から近くの寮で生活している。

だが週末には必ず戻ってきて土日は自宅で過ごしている。

本人曰く「寮じゃ後輩や同級生が五月蠅い」らしいが、照れ隠しか本心かは啓介にはわからない。

「（問題は妹だアアーツ！！）」

今日は四月八日。

月曜日ではあるが、妹の在籍する学園での始業式は四月十一日である。

啓介の妹は一昨日の電話で「部活の合宿からやつと帰ってきた」なんて言っていたので間違いなく帰ってくると啓介は予想している。

「（鉢合わせになって修羅場とかマジ勘弁願いたい……）」

啓介の妹は何故か自分と友好的な女性を嫌う傾向にある。

昔は「もしかしてお兄ちゃんを奪われるかもしれないという嫉妬じゃね？」なんて考えて自分で気持ち悪すぎて鬱になった記憶があるが、本当の理由はわからないままである。

「（まあ、女性の友達なんて後にも先にもアイツ一人なんだろうけどな）」

啓介は数年前に別れた（恋愛関係的な意味ではない）幼馴染のことをチラッとだけ思い出した。

辺りを見回すと既に教室に担任が入ってきて何やら連絡を話していたが、啓介は聞いていなかった。

「（ああああ……胃が痛い）」

妹がアリエルにどんな反応を示すのかが不安で仕方なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7919y/>

クロス×ドミナンス

2011年11月27日14時49分発行